

別れるど安積あさかの沼こまの駒こまなれば面影にこそ離れざりけれ

能因

能因といえは「都をば霞とともに立ちしかど秋風ぞ吹く白河の関」と、この歌に纏わる籠居の逸話から、数寄者としての人物像が広く知られているが、彼は馬を愛する人でもあった。

掲出歌は旅をともにしてきた馬が病気で死んだ時の作。

「馬とは死に別れてしまつたけれど、姿が見えるというあの安積の沼の馬なので、その面影がいつまでも私のまぶたから離れない」。「安積の沼」は愛馬の生まれ故郷、陸奥の国の名所で、現在の福島県郡山市の安積山のふもとにあつたとされる沼。「あさか」の名を持ちながら、思いのほか

に底が深いものとして和歌にもたびたび詠われてきた。恋しい人への浅からぬ思いを伝える歌枕を、能因は馬への深い愛情を伝えるために詠んだ。「面影」という言葉にも、馬を単なる移動手段としてではなく、長い旅を併走す

るパートナーとしてまなざしていたことが伝わってくる。寿命を全うすることなく、病死という思いも寄らない別れに、ともに過ごした旅の時間が遠く懐かしく思いだされたことだろう。

取りつなく駒とも人を見てしかなつひにはあれじと思ふばかりに

これも陸奥の馬を詠んだ作。親しく付き合っていた亡き友人を偲ぶため陸奥の家を訪ねて行き、荒れた仕草をする馬を目にした時の一首。荒れた家に主人が繫いだそのままに馬が残されている。しかし亡くなった友人にはもう二度と会うことは叶わない。彼がもしこの馬であつたなら……。当惑して荒立つ馬の仕草に自身の心を重ねながら哀しく見詰め、かつての友情を親しく思い返している。人と馬への慈しみの心情が滲む秀歌だと思ふ。

長曆四（一〇四〇）年の春、愛馬を失つた掲出歌から始まる伊予国在国中の歌群は、五年の歳月を経た寛徳二年の春にふたたび伊予国で馬と別れることの感慨を詠んで結ばれる。いずれも『能因集』収載。（小島なお）

